

Title	福澤自筆の葉書について
Sub Title	
Author	富田, 正文(Tomita, Masafumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1956
Jtitle	史学 Vol.29, No.1 (1956. 5) ,p.93- 94
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560500-0093">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19560500-0093</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

跡であるが、昭和二十八年江戸川區郷土研究會が發掘調査した折  
り、彌生式土器片も出土した旨が記されている。

三、原史時代の頃、この項も先づ最初に「時代のあらまし」な  
る項を設け、わが國の原史時代文化について略説をなし、ついで  
『江戸川流域の原史文化』なる項をつくり、江戸川流域の原史時代  
遺跡について簡単に報告し、次に「區内發見の遺跡と遺物」なる  
項で、小岩町六丁目上小岩遺跡、勢増山遺跡、小松川境川遺跡、  
鹿島山遺跡、春江町遺跡などについて報告している。

小松川境川遺跡は西小松川町香取神社附近に所在する鬼高式の  
土師器を出土する遺跡で、須惠器も出土し、また中小型の管狀  
土錘が多數發見され、この時代この附近が砂洲をなし、東京灣奥  
部の汀線がこの附近にあつたことが想定され、原史時代の東京灣  
岸の海岸聚落を考える上に興味ある遺跡である。

區史編纂の前に一應の發掘調査でも行い、聚落址としての遺跡  
の實體を若干なりと把握し、いますこし詳細な報告がなされたな  
らと残念に思うものは評者一人ではないであろう。

本一色町鹿島山遺跡は土錘、常滑焼などを出土する鎌倉乃至は  
室町時代の貝塚と報告されており興味を引くものである。

また後篇第十二章の中に「埋藏文化財と區内の板碑」の項があ  
り、區内に現存する三二例の板碑が紹介されており、年號は康永  
二年（一二五三年）から享祿四年（一二五三年）のものまであり、

種子は阿彌陀が大半を占めるが、題目板碑も二例ほど見られる。  
以上江戸川區史の一端考古學的研究部門の紹介をなした次第で  
ある。なお昭和三十年三月には杉並區史、足立區史、新宿區史、  
荒川區史（上・下二卷）なども刊行され、いつれの區史も、自區  
内發見の遺跡、遺物の研究に相當數の頁を割かれていることを附  
加しておく。

## 雜 報

### 福澤自筆の葉書について

富 田 正 文

私は曾て本誌第二十七卷第二・三號慶應義塾史研究特輯號の口  
繪に福澤自筆の葉書を掲げ、その説明文の一節に次のように記し  
た。

この葉書は（中略）第一面は青色刷りオーナメント野で縁どり、  
左上隅に同色で一錢切手を刷り、左端中央に「郵便はがき印紙」  
の文字を刷り出してある。第二面は赤色刷で規則を掲げ、第三面  
が通信欄、第四面が無地である。

郵便ハガキ紙並封囊發行規則の出たのが明治六年十二月一日  
で、様式が改まつて現行の一枚ものになったのが明治八年五月十

日の官令によるから、この型の葉書の行はれたのは約一年半ばかりの間である。

この記述に誤りはないが、この一年半ばかりの間に同じ型式で印刷の異なるものが三種類発行されたことを、昭和三十年二月中旬神田三省堂に開かれた郵便切手展覽會を見て松本保平氏の出品により知つたからこゝに補足しておく。

明治六年十二月一日に發行されたものは、蒐集家の間で俗に「べにわく」と呼ばれているもので、第一面のオーナメント野粹が紅刷りで、左脇の「郵便はがき印紙」の文字のないものである。市内半錢の料額印面が黄色、全國壹錢の料額印面が青色で刷つてある。

同年十二月(日不詳)第二回目に發行されたものが、前記福澤文献の一つとなつた第一面青刷りの葉書である。これには左脇に「郵便はがき印紙」の文字がついているので、俗にこれを「脇付はがき」と呼ぶ。市内半錢のものは見ないが、これは或は第一面の刷り色が違ふのかも知れない。

更に明治七年四月一日に、左脇の「郵便はがき印紙」の文字のないものが發行された。これを俗に「脇なしはがき」と呼ぶ。市内半錢の料額のものには紅刷り、全國壹錢の料額のものには青刷りである。最初の「べにわく」と見違える虞れがあるが、料額印面に「郵便切手」とあるのが、「郵便はがき」と改まつている點が大

きな相違である。

前記福澤文献の葉書は「脇付」であるが、これは發行期間が甚だ短かつたという。福澤の葉書の日附を見ると「脇なし」の發行された後に使用されている。郵便役所に「脇付」の賣れ残りがあつたのを買つたのかも知れないが、福澤が葉書一枚買ひをしたとも思はれないから、買ひ置きのものを使用したと見る方が妥當であらう。さうすれば、まだ外にも福澤の使つた葉書はあつた筈である。どこかに保存されたものが出て来ないものであらうか。

### 考古學研究室の寄贈資料について

昭和十一年における日吉矢上古墳の發掘を契機として急速な發展充實を見せつた我文學部考古學研究室も、疎開寸前の戦災によつて所藏資料の大半を失ひ、主要なものとしては、わづかに國寶秋草文壺、矢上古墳出土品を初め、日吉周邊の彌生式、古墳遺物、中國出土資料の一部等を止めるにすぎぬ状態で終戦を迎えた。しかしながら戦後の困難な状態の中において、松本信廣教授を中心に鋭意再建の歩が進められ、藤田亮策講師の力強い援助と相俟つて、今日では戦前を遙かに凌駕する充實振りが見られるに至つたことは、まことに喜ばしい限りである。ただし、それは我々の仕事に深き理解を寄せられ、絶大の支援を與えられた多